
ブースト・ブレード

山中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブースト・ブレード

【Nコード】

N9560Z

【作者名】

山中

【あらすじ】

機械が発展した村、機重村。

そこに住む約百二十人の子供は

ある日、ゲームの世界引きずり込まれる。

第一話：起動

今現在、俺はどこにいるのだろう？

そう思い、一度目を閉じる。

そして、すぐ開ける。

でも、何も変わっていない。

目の前には唯一の親友だけ、それ以外は、

真っ暗な闇で覆われていた。

どうしてこうなった？

考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ、考えろ。

数時間前

俺、佐藤セナさとうは、早朝に家を出た。

理由は、日直だから。

俺の住んでいる機重村きぢゅうそんは、ある技術が発達している。

それは機械。

クーラーや、携帯電話・冷蔵庫・ストープなどの、電化製品は当然。

車や、バイクなどの自動車。

すべてが最先端の機械ばかり。

そして、中でも一番すごいのは、パソコンとハードディスク。

ここは人口がとっても少ないのでパソコンによるカリキュラムを受けている。

まあ、出費を少なくするために二人で一台を使っているのだが。

さて、日直だから早く学校に行かなければいけないのは、パソコンを、クラスの人数の半数持っていかなければいけないのだ。

「失礼しま〜」

「今日は遅かったね〜。セナ君」

俺の声を遮ったのは、俺のクラスの担任である、
？咲モミジ。彼女はプログラミングの天才である。

「はい、これ、二十個あるから重いよ〜」

脳天気言いながら、パソコンの入った籠を出してくる。

「なら、手伝ってくれよ」

「いや」

即答だった。皮肉気味に言ったのに、一言で断わりやがった。

「あれ？ディスクはどうした？」

籠を受け取ると、いつもなら一緒に入ってるディスクがない事に

気付いた。

「ああ、それなら〜、あとで私が持って行くから〜」

「ふ〜ん……。了解」

「じゃ、また後で〜」

そう言っモミジと別れ、教室へ。

この学校は、数少ない人口の子共が通っているため、
学年など関係なしになっている。

生徒の総数は約、百二十人。

全学年あわせて百二十人ぐらいなのだ。

俺は教室のドアを開けて中を見ると先客がいた。

「よ、セナ。日直乙」

「そう思うなら手伝ってくれ。マコ」

彼は鈴木マコト。オタクである。

ちなみに、俺はゲーマーである。

「手伝ってもいいけどよ〜。条件がある」

「なんだ？」

こいつが条件と言うと簡単なものか、無茶なものの二つに分かれ

る。

「こないださ、新しいゲームを見たんだけど……」

「どんな感じのストリで、なんて題名だ？」

マコトの家はゲーム会社見たいなもので、

マコトは新作のゲームがどんなのか見れるのだ。羨ましい。

「題名はB、Bって書いてあった。ストーリーは……覚えてないや」

B、B……か。どんなだろう。

「んで、それがどうした？」

「ん、出たらさ、一緒に攻略してくれ」

「分かった。出たらお前と最初に攻略しよう」

俺はゲーマーな為、新作ゲーム等の攻略を手伝ってほしいとよく依頼されるのだ。

「んじゃあ、交渉成立つと」

「俺は左の方を準備するから、セナは右を」

「オッケー」

短い返事をして、準備に取り掛かった。

二人でやったおかげで、十分で終了した。

「ありがとう。助かった」

「どういたしまして」

礼を言ったらドアが開いた。

「おっはよ」

「……………」

入ってきたのは二人。

どちらも同年代の知り合い。

「今日はセナ君が日直だったんだね」

「マコが手伝ってくれたんだよ」

「へへ。マコ君偉いね」

活発というか、元気というか、とにかく明るいこの子は、

ついでに

東條アキ。マコトの思い人である。

「おはよう、ユナ」

「……………おはよう」

この、無口な子は柊ユナ。

俺の思い人である。

アキは明るく元気で、優しいので、ファンクラブもある。

また、ユナも無口だが可愛くて、背も低いので、ファンクラブがある。

「……………でさー」

「へー、そうなんだ。知らなかった」

すぐそこでマコとアキが会話していた。

いいなー。羨ましい。俺もユナと話したい。

「……………なあ、セナ」

「ん、な、なんだ」

いきなりでびっくりしたー。

でも、ユナから話しかけられるって初めてだな。

「……………セナがマコトの事が好きって……………」

「それはデマだ」

ユナが言い終わる前に断言した。

なんか、あれだ。

俺とマコが仲が良いってだけでそんな噂を誰かが立てやがった。

「……………そう、なのか？」

「ああ、そうだ」

「……………そうか、良かった」

最後の方は聞き取れなかったが、何故か安心したようだ。

しばらくユナと話していると、他の生徒の声が聞こえてきたので、

撤退。

俺達がこの二人と話しているのを知られたら、クラスの全員に殺される。

その後はマコと他愛もない話をした。
言っていなかったけど、俺とマコは席が隣だ。

チャイムが鳴り響き、暫くしてモミジが教室に来た。
「全員席についてる？ 今からディスク配るから」
そう言っでディスクを配っていくモミジ。

「先生、これって何のディスクですか？」

「これ？ なんか B、B って言ってたけど」

B、B どこかで聞いた名前だな。

「おい。おい、セナ」

「ん？ なんだ？」

小声でマコが話しかけてくる。

「B、B って、ほら、朝話しただろ」

「ああ、そう言えばそうだな」

なんか新しいゲームのソフトで、マコと一緒に攻略するって約束した……。

「って、それって！」

「ああ、アレが本当に B、B なら」

「これは、ゲームソフトって事か」

「そう言う事だ」

でもおかしいな、学校でゲームなんて、
校長はともかく、あの鬼理事長が許すわけがない。

「みんな、ディスクセツトした？」

「やべ。早くセツトしようぜ」

「ああ、分かった」

俺よりマコが作業した方が早いので、マコに任せる。

「よし、後は起動ボタンを押すだけだ」

マコの作業が終わってすぐに

「それじゃ、起動ボタン押して」

その声と同時に俺たちは起動ボタンを押した。

カチッ

そして、押した瞬間、目の前が真っ暗になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9560z/>

ブースト・ブレード

2011年12月29日21時45分発行